

とうなすやせいだん
唐茄子屋政談 下



せいがんじだな
八 誓願寺店・弁当

もう日は高くのぼり、ちょうどお昼ごはんを食べるくらいの時間になっていました。徳兵衛もお腹がすいてきました。

「いやあ、どういたしまして。そのかわり、（ー）があるんでございます。や、あの、あたしね、まだお弁当を食べてないんです。ですから、ここでちよいと、つかわせていただけますでしょうか。」

それを聞いたおかみさんは、

「ああ、どうぞどうぞ。」

と言って、ちよつとわたがはみ出ている、そまつな^ア座布団を出してくれます。そして、^イ縁の欠けた湯呑みに、お湯を一杯ついで、「さあ、どうぞ」と出してくれました。

弁当を開けて、徳兵衛がさあ食べようとすると、部屋の奥にあったつい立ての後ろから、年の頃で言えば五つか六つの男の子が顔を出して、

「ああ、ごはんだ……ごはんだよ……」

と^ウ恨めしそうに徳兵衛の弁当を見えています。

「これ、（２）。このお弁当は八百屋さんのお弁当です。あなたには今からお唐茄子を煮てあげますから。」

そうおかみさんが（３）のも聞かず、

「やだよ、おいら唐茄子なんかいらぬ。ごはんが食べたいよ。」

男の子はさわぐのを止めません。

おかみさんが困った顔をしながら、「ごはんだ、まんまだ」とさわぐ坊やにいろいろ

言って聞かせていると、徳兵衛がそれを見かねたのか、

「あの、これ。その坊やに（４）くださいまし。」

まだ（５）いない弁当を差し出しました。

「そういうわけにはまいりません。八百屋さんも、朝からお仕事をされて、お腹がすいていらつしやるでしょうし。」

おかみさんがすまなそうに言います。

「いえいえ、そりゃいいんです。唐茄子も全部売れましたし、帰ってからご飯をいただきますから。これどうぞ、坊やに。いえいえそんな^エ遠慮なさらずに、かまいませんから、さしあげてくださいまし。」

徳兵衛が強く言うので、おかみさんはお弁当をいただくことにしました。

九 誓願寺店・売りだめ

せいがんじだな

「それでは、遠慮なくちょうだいをいたします。ありがとうございました。」

徳兵衛にお礼を言ったおかみさんが、男の子の方へ向いて、

「これ、お前がさわぐから、八百屋さんが、お前にお弁当をくださるという。よくお礼を申し上げて、お弁当をいただきなさい。」

と言うのだけれど、①男の子の方は、おかみさんの言葉が耳に入っているのかどうか、夢中で弁当のおにぎりにかぶりついています。

「そんなにあわてて食べなくても、誰もとりやしないよ、誰も……」

おかみさんが言葉をつまらせるので、徳兵衛がどうしたのかとおかみさんを見ると、何と涙を流しています。徳兵衛はびっくりしてわけを聞きました。

このおかみさんは、元はお武家様ぶけさまの奥様だったので、今はわけあってご亭主ていしゅは浪人ろうにんをしており、そのご亭主は小間物の旅商たびあきないをしています。はじめは仕送りが毎月あったのですが、近ごろはその仕送りも途絶とだえがちになり、不足おびぎなを補うために、おかみさんは長屋の人たちのそうじや洗濯をして忙しく働いていたそうです。

ところが、この十日ばかりおかみさんが風邪かぜをひいて寝込んでしまいました。頑張っていた仕事も休むしかありませんが、仕事を休めばお金は入ってきません。あつという間に食べ物がなくなってしまって、息子にはここ三日くらい何も食べさせていないということでした。

徳兵衛は、話を聞くうちに、大變気の毒に思いました。

「それは、それは……大變でございましたね。そりゃねえ、ほしがるのも無理はありませんよ。ええ、そりゃもう何がつらいつて、腹がへるくらいつらいことはないんですから。いやあ、②あたしもおぼえがありますがね。まして坊やじゃ、無理はありませんよ。」

そう言つて、男の子が一生懸命お弁当を食べる姿に目をやりました。

自分もつい昨日までは、腹をへらして、食べるものにもありつけず、町をふらふら歩くだけでした。たまたまおじさんに助けってもらつて、そして昨日久しぶりに飯を食べたのですが、その飯のうまさと言つたらありませんでした。

今は、おじさんが助けてくれたおかげで、自分は家に帰れば飯が食える。でも、このおかみさんと男の子には、次いつお金が入ってくるか分からない。

「御亭主も、今はうまくいなくなつて、必ずまたね、ええ、商いの方もうまくいつてね。ちゃんと、お金も送ってきてくれますよ。まあ、気を落とさないで、ひとつ……ええあの、また……やつておくんさいまし。」

言いながら、こんな言葉をかけても気休めにもならないことは徳兵衛自身でもよく分かっています。しかし、目の前で困っているおかみさんと男の子に何かしてあげられることはないのでしょうか。

徳兵衛は、何か思い切つたように唇をかみしめると、首から下げた銭の袋をつかみ、ぐるぐるとひもで巻き始めました。この袋には、唐茄子を売ったお金がすべて

入っています。

「ええ、あ、あの、あの、おかみさん、これ、まことになんなんですけど、今日の売りだめなんですけど……これで坊やに、あとで何か買ってやってくださいまし。」
ずっしりと銭の入った袋をおかみさんの前に置きます。

「ああ。とんでもございません。そんなことをしてもらっては困ります」

(一)、おかみさんが断るのですが、徳兵衛も言いだしたら聞きません。

「いいえ、そんなことを言わずに、お願いします。あたくしのほんの気持ちです。たいたことはいいんです。あたしが稼いだんですからね。別に、誰に何と言われることもないでございます。かまいませんからどうぞ。」

「いいえ。それは困りますからどうぞごかんべんを。」

「いいえ、そんなこと言わないでまあまあ、取っておいてくださいましよ。」

③二人で押し付け合いをしているうちに、徳兵衛が

ぱーん

とたたきつけるようにして、売りだめを置いたかと思うと、逃げるように天びんをかついでうちに帰って行きました。

十 おじさん

「おじさん、今帰りました。」

まだ昼過ぎだというのに、おじさんの家に帰った徳兵衛を見て、おじさんは驚きました。

「おい、もう帰ってきたのか。唐茄子はどうした。」

徳兵衛のかついていた天びんの唐茄子は空っぽです。

「全部売れたのかい。今日初めて商いに出かけたのに、驚いたね。まあよくやった。」

「さすが商人の息子だ。よくやったよくやった。」

おじさんはとてもうれしそうに、徳兵衛をねぎらいます。

「だが、一体どうやって、あれだけの唐茄子を売ったんだい。」

徳兵衛は、転んで助けもらった人に茄子をさばいてもらったことをまず話しました。するとおじさんは（ー）したように言いました。

「それはいきなりごひいきができたってことだ。商売するのはまずかわいがっていただくことが大切だ。そうだ、腹へったろう、今準備させるから待っていなさい。」

と言って台所に声をかけてから、

「じゃあ、売りだめを出してもらおうか。」

徳兵衛に今日唐茄子を売ったお金を出すように言いました。

すると、徳兵衛は、

「それが……ないんです。」

と下を向いてしまいます。

「ない？ないってどういうことだ？」

きつい口調に変わったおじさんの問いに、

「人に、あげてしまいました。」

徳兵衛は申し訳なさそうです。それを聞いたおじさんは、また台所に向いて

「①おい、飯はやっぱり出さなくていいぞ」

と言うと、また徳兵衛に向き直り、

「徳兵衛 お前もしかして、唐茄子が売れたからってその金を持ってどっかで遊んで

きたんだろう！『人にあげた』なんぞ、子供でももつと（2）嘘をつくっても

んだ。やい、この野郎！」

と怒鳴りつけました。

「いえ、本当なんでしょう。実は……」

と言って、田んぼの向こうの長屋であった出来事をおじさんに話しました。

それを聞いたおじさんは、

「ふむ。よし分かった。じゃあこうしようじゃないか。今からその長屋へ行って、そ

のおかみさんに聞いてみるよ。②嘘じゃないってんなら、それでいいんだ。いいか

徳や、気を悪くしちゃいけないよ。本当だったらおじさん怒りはしないんだから。

さあ、今からそこに連れて行ってくれ。」

そう言うと、徳兵衛をともなって、誓願寺店の長屋へ出かけました。

十一 長屋

「たしか、この長屋です。」

徳兵衛がおじさんに言うと、何やら長屋の奥がちよっと騒がしいではありませんか。徳兵衛とおじさんが奥へ入って行き、

「たしかこのあたりだったんだけどなあ。」

迷っているわけにもいけないので、そのうちの^アいっけんに声をかけてみます。

「すみません。ごめんください。ここいら辺に、五歳の男の子がいて、ご亭主は小間物の旅商いをしているおかみさんはいませんか。」

すると、そこに住むおばあさんが、

「ええ、ええ。いますとも。この隣に住んでいる方がそうだと思いますが、あなたさ

まはっ。」

「私は、昼間に唐茄子を売りにきた者です。」

「おや、ということはあんた。昼間やってきた唐茄子屋さんかい。」

と驚いたように言うではありませんか。

おばあさんは徳兵衛を^イおがむように近づいてきて、

「よく来てくれたよ、唐茄子屋さん。あたしたちは、あんたがまた^ウたずねて来てくれるのを待っていたんだ。お弁当をあげるだけでなく、売りだめをそっくり置いていくななんて、まあ、なんて^エえらい方がいるもんだと思っておりました。」

「はあ、ではその、おかみさんは隣にいますね。」

と徳兵衛が隣へ行こうとすると、すぐにばあさんが徳兵衛を引きとめて

「その、おかみさんなだけどね……」

と言ったまま、はらはらと涙を落とし始めました。

ばあさんの涙のわけはこういうことでした。

徳兵衛が売り銭をすべて置いて行った後、おかみさんは

「やはりこのお金をいただくわけにはいかない」

と、お金を持って徳兵衛の後を追いかけてしようとしました。

(一)の悪いときというのはあるもので、そのときちょうど長屋の出口で、この長屋の大家とばったり出くわしてしまいます。その大家が、

「その金はどうしたんだい」

と聞くと、おかみさんは

「これこれこういう訳で」

とそのお金が唐茄子屋の売り銭であることを話しました。すると大家は、

「ちようどいい。たまっている^オやちんをその金で払ってもらうよ。」

と言って、嫌がるおかみさんから無理やりお金をうばってしまいました。

「唐茄子屋さんに返そうと思っていたお金を取られてしまった。」

どうしようどうしようと泣いているおかみさんを、長屋のみんなでなんとかなだめます。長屋のみんなとしても、相手が大家さんなので、なかなか強く出ることができません。仕方なくおかみさんも部屋にもどりましたが、しばらく経っていやに静かだ

なと思ったら、おかみさんの部屋から子供の泣き声が聞こえてきます。

どうしたのかと思って隣のばあさんが部屋をのぞくと、さあ大変です。

なんと、おかみさんが梁にぶら下がって、首をつっているではありませんか。

「はやく下ろせ！」

「すぐに医者を呼べ！」

長屋中がひっくり返るような騒ぎになって、今はお医者さんがおかみさんのそばについているものの、おかみさんはまだ（２）をさまよっているようで、長屋のみんなで心配になって集まっているということでした。

十二 徳兵衛

「おじさん。聞きましたか。」

徳兵衛がおじさんを見ると、おじさんも不機嫌な顔をしています。おじさんは、長屋のばあさんの方へ向いて、

「いや、私はこれの『おじ』で、今いろいろわけあって家に引き取ってるんですが、そうですか。唐茄子の売りだめをそっくり渡したというものですから、そりや大変なことだということで、こうしてここへ訪ねてきたのですが……それにしても、ひどい話です。実は私も達磨横丁だるまよこちようの方に三十軒ばかりある家主をしていますが、そんなひどい真似はととてもできるものではありません。で、その大家さんってのはどちらにお住まいで？」

と聞いたところ、長屋のみんなが、

「すぐその家ですよ。」

と指さします。

すると、それを聞いた徳兵衛が、

「こんちくしょう！」

と走り出し、あっという間に大家の家の戸を開けて中に入って行ってしまいました。

中にいた大家の夫婦は、ちょうど夕飯を食べているところでした。びっくりしたのは

大家の夫婦です。

「だれだ！お前は！」

「八百屋だ！」

「八百屋に用はねえ。」

「うるせえ、そっちに用がなくても、こっちには用があるんだ！あの売りだめはな、お前らにやったんじゃないやねえ、おかみさんがかわいそうだからやったんだ。」

飯を食う大家の前に、仁王立ちに立つ徳兵衛を、長屋の住人たちも戸口からのぞきこんでいます。

「それをお前らときたら、のん気に飯なんざ食いやがって！おかみさんはな、おかみさんはな、①お前らのせいで、梁にぶら下がっちゃったんだぞ！」

最後の方は、わあわあ泣きわめきながら、その辺にあったやかんをつかむと、大家の頭をがんがんなぐりつけました。

「助けてくれ！」

長屋の人たちに助けを求める大家さんですが、当然、だれも助けません。おかみさんからお金を奪った（ー）、首をくくるところまで追いつめるような大家さんを、誰が助けたいと思うでしょうか。

ひとしきり大家の家で暴れた徳兵衛ですが、どうしても怒りがおさまりません。というのも、自分がもう一度ここに来なければ、おかみさんに渡したお金は、大家さんに取られたままで、返してはもらえなかったでしょう。そのことを思うと、徳兵衛は腹が立ってしょうがありません。

後日、徳兵衛は、この一件を奉行所に申し出ました。

その結果、大家さんは奉行所からきついおとがめを受け、徳兵衛は人助けをしたということで、ほうびをいただきました。

おかみさんは、お医者さんの処置がよかったのか息を吹き返し、ご亭主がもどってくるまでおじさんの長屋に住まうことになりました。

徳兵衛は、あっぱれ善い行いをしたということで、勘当が許され、後には立派な商人になったということです。

めでたし、めでたし。